

2019年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
 (新学習指導要領に向けた実践研究)
 成果報告書 (概要)

受託団体名
埼玉県

1 指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
埼玉県	特別支援	病弱	埼玉県立けやき特別支援学校

2. 事業の実績

(1) 事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
平成 31 年 4 月 24 日	全体研究会 (研究概要説明)	○計画どおり実施・終了
令和 元年 5 月 20 日	毎月 1 回 授業改善に向けた研究グループ 別途、毎月 ICT 活用研修 または 研究推進のための研究会議 (新学研) を実施 研究 G : 6/20, 7/16, 9/12, 10/10, 11/19, 12/19, 1/23, 2/20 新学研 : 5/31, 6/28, 7/22, 9/27, 11/1, 12/17, 1/31	○計画どおり実施・終了 各研究単位での会議を定期的に設定することで、研究推進することができた。 研究推進とは別途、新学研を設定することで ICT 研修等も同時進行できた。
7 月 26 日	教育課程に関する研修 (京都女子大学 滝川 国芳 教授) テーマ : 『学習科学に基づく教育活動』 ～新たな学びを実現するための 学習環境デザイン～	○計画どおり実施・終了 左記内容についての講演および本校の ICT 活用について、各 WG の巡回指導。 講演および巡回指導等、研究推進に当たり、具体的に御教示いただくことができた。 内容としては、メタ認知をはじめとする学習科学を基本とし、3つの学びへのアプローチの仕方、実践例を提示しての3つの学び、ICTの活用について御

		講義いただいた。
9月20日	VR体験研修 (株式会社リコー クマちゃんプロジェクト) 芸術鑑賞会への参加	○年度途中で追加・実施 外部機関の協力を得て、例年開催している芸術鑑賞会(音楽鑑賞)を病室にて鑑賞することができた。 VRの即時配信ということで、今後の活用に向けての一つの指針とすることができた。
令和元年12月12日 ～12月13日	KUBIの活用に関する県外視察 【青森県立浪岡養護学校：1名】	○概ね計画通り実施 遠隔授業を進めるにあたって、本校で導入を検討している機器を使用している学校の視察を実施。 実際に使用する際の留意点についても情報交換等を行い、確認することができた。
令和元年12月17日	新たな学び推進プロジェクト授業公開 【埼玉県立越谷西特別支援学校：2名】	○概ね計画通り実施 埼玉県の委嘱を受けている学校の授業公開参会。 ICTを活用した実践例の見学とICT環境整備につながる企業・業者と情報交換ができた。
令和元年12月20日	復学のための双方向授業支援 【さいたま市立つばさ小学校：1名】	○年度途中で計画・実施 前籍校と双方向通信技術を活用した実践の授業支援。公立の小中学校で受け入れ数が少ない中、協力を得られた。児童・保護者・前籍校共に好評で、今後につなげていきたい。
令和2年1月22日	主体的・対話的で深い学びに結びつく精神疾患・心身症理解のための研修 (聖学院大学・立教大学講師 赫多久美子氏) テーマ：『“弱さの情報公開”で仲間と見つける 自分の助け方～浦河べてるの家の当事者研究に学ぶ』	○年度途中で追加・実施 左記内容について講演および伊奈分校の教育についてご教示いただいた。 精神疾患の当事者研究の実践を通して、本校の児

		<p>童生徒にできる3つの学びを実現するためのアプローチ法を示唆する内容だった。</p>
令和2年1月24日	<p>小平特別支援学校授業研究報告会 【東京都立小平特別支援学校：1名】</p>	<p>○年度途中に計画・実施 遠隔授業を取り入れた実践の参観。併せて、研究委嘱の本発表ということで、次年度の研究報告会運営の参考になった。</p>
令和2年2月6日	<p>主体的・対話的で深い学びの授業づくりに結びつく支援方法のための研修 (東京学芸大学 橋本 創一 教授) テーマ：『主体的・対話的で深い学びに基づく授業づくり』</p>	<p>○年度途中に追加・実施 左記内容について研究授業の指導講評および講演を行った。 3つの学びを実現するために「何を教えるか」はもちろん「どのように学ぶか」という学びの質や深まりが重要な視点になるとしたうえで、障害特性や実態に応じた授業づくりのアドバイスをいただいた。</p>
令和2年2月25日	<p>研究授業・研究報告会 指導者 京都女子大学 滝川 国芳 教授 埼玉県教育局特別支援教育課 内川 雄介 指導主事 佐藤 幸博 指導主事</p>	<p>○計画どおり実施・終了 大学教授、県教委より指導者をお招きして、指導助言をいただいた。 授業への具体的なアドバイスおよび講評と ICT 環境整備に向けた国、県の動向についての情報提供をいただいた。</p>
令和2年3月9日	<p>主体的・対話的で深い学びの授業づくりに結びつく支援方法のための研修 (広島大学 栗原 慎二教授) テーマ：『愛着と発達に課題のある子どもへの対応』</p>	<p>○年度途中に追加・実施 左記内容について、講演及び演習を行った。 精神疾患・心身症や発達障害の二次障害等の児童生徒への対応及びピアサポートや共同学習等についてご講義いただいた。</p>

		また、実際の授業場面を想定した演習も行った。
3月23日	今年度の総括および次年度の概要	○計画通り実施・終了 来年度の研究方針及び日程等について確認した。

(2) 研究課題

病弱教育における主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりに関する実践研究をテーマに、3つの学びの実現に向け、ICTの活用を図ると共に、効果的な指導内容・方法について研究する。

(3) 研究の概要

病弱教育における主体的・対話的で深い学びの実現に向け、下記の2つの柱を中心に実践研究に取り組んだ。

I 主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善

主体的・対話的で深い学びに焦点を当て、これまで取り組んできた授業実践との関連や課題を整理し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の方向性を明らかにしていく。

II 主体的・対話的で深い学びの授業づくりのためのICTの活用

ワーキンググループ（以下WGと省略）を設定し、各WGで活動（事例報告等）を行った。授業改善の方向性と併せ、次のテーマを中心に病弱教育におけるICTを活用した指導内容・方法の実践に取り組み、主体的・対話的で深い学びの授業づくりに取り組んだ。

①障害特性に応じたICT機器の有効活用

デジタル教科書やタブレット端末等の実践例を蓄積し、障害特性に応じてICT機器を有効活用した指導方法や指導内容を検証

②双方向通信による学習

双方向通信技術を活用し前籍校での教育活動への一部参加や行事不参加時の校内やベッド上での間接体験の実践

③VR等、仮想現実、疑似による体験学習

VR等の新たな技術を使った機器を活用し、仮想体験や疑似体験による学習への参加を実践

(4) 研究の成果

1 授業づくりに関する成果

(1) ICT機器の活用により、入院による活動制限の改善を図り、校外学習に病室からリアルタイムで参加したり自分で機器を操作して活動に参加したりするなど、児童生徒の主体的な姿勢を引き出すことができた。

(2) ICT 機器を活用して教室と病室をつないで話し合い活動を充実させるなど、対話的な学習を積み重ねることができた。また、仲間以外の対象（自己、もの）との対話の在り方についても考えられるようになった。

(3) 児童生徒の ICT 機器への抵抗感の払拭・軽減が図られ、過度の緊張感がなく普段と同じ様子で病室と教室で会話ができるようになるなどの改善が見られた。

(4) 教員の ICT 機器への理解が深まってきたことで、児童生徒の心理状態やその場面に適切な機器を選択、活用できるようになった。

2 ICTの活用に関する成果

(1) インタラクティブホワイトボードについて

具体的な児童生徒の姿として、視覚的に教材を提示することにより学習課題を捉えやすくなったり、興味関心を増す様子が見られたりしたという成果を得ることができた。

(2) 同時双方向型通信について

多くの授業で Zoom を中心とした技術を活用し、教室と病室や校外学習先、地元校等とをつなぐ実践を行うことができた。教員が多くの経験を重ねたことで、周辺機器の改善にも取り組み、よりよい形で活用することができるようになってきた。

(3) 360° カメラ及びVR映像について

360° カメラについては、児童生徒自身で積極的に見たい対象に焦点を当てる様子が見られたり、集中して取り組む姿が見られたりした。VR映像については、治療により外に出られない児童生徒が外に出た気分を味わえる取り組みを行うことができたり、水中などの実際には見ることができない映像を見ることで、興味関心を高めたりすることができた。

(5) 課題と今後の方策

1 課題

(1) 「主体的な学び」に向けて

入院生活による活動の制限を ICT 機器の活用により取り除き、そのことにより児童生徒の主体的な姿勢が引き出せたという具体的な実践は積み重ねることができている。今後も実践を充実させていくことで入院により失われてしまうものが少なくなるように努めたい。

(2) 「対話的な学び」に向けて

仲間や教員とだけではなく、自身や教材（もの）との対話を進めた実践も積み重ねられている。これらの点は引き続き進めたいと考えるが、転出入が多い本校の特性から「関わりが多くない児童生徒同士でも対話的な活動を充実させるための工夫」など、現状より一歩進めた実践ができるとよいと考える。

(3) 「深い学び」に向けて

この課題の解決に向けては、まずは主体的、対話的な学びを多く積み重ね、その中で児童生徒の変容や様子を丁寧に読み取っていくことが必要になると考える。実践報告を書く際の書式を改善するなどして、意識的に深い学びを追い求めていくことで課題の解決を図りたい。

2 今後の展望

現在では機器を活用した授業、教室と病室をつなぐ授業は当たり前になり、当初とはだいぶ見える光景が変わってきたことを感じる。教員が機器を活用できる力も高まってきており、従来の教具と同列に考えて使用できるようになってきつつあることも ICT 機器の活用を後押ししている。

一方で、本研究のテーマは「病弱教育における主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりに関する実践研究」である。中でも「深い学び」について、どこまで迫ることができたのかという点を考えると、まだ十分とはいえない。ICT 機器を活用しつつ「深い学び」に迫る実践、これが最終年度に向けた最も大きな課題であると考ええる。

引き続き ICT 機器を活用しながら、児童生徒の確かな学びにつながる実践を積み重ねていき、「深い学び」に近づくことができればと考える。